

日本、中国、韓国の ドイツ語文学学科カリキュラム比較^(*)

栗 山 次 郎

前 口 上

戯曲や小説ならいざ知らず、論文で「前口上」を述べるのは、粹小説ならぬ「粹論文」の趣であり、いささか論文の体裁を欠く仕儀ではありますが、筆者が当紀要に投稿するのも最後であるのに免じて、不体裁をお許し願いたい。

着任時に予定していた仕事

筆者は1988年4月に情報工学部に着任した。その時に（教育は別として）三つの仕事を自分に課していた。ドイツの自由学校を日本に紹介する、パウル・レーの作品を論じる、ニーチェの大型インデックスを作る、の三つである。最初の課題は1995年に『ドイツ自由学校事情』（風媒社）を出版したので一区切りとした。二番目の課題は当紀要をはじめ、いくつかの研究誌や出版社の宣伝誌にレーの作品訳や生涯について紹介した。当紀要18号（2005年3月）掲載の『良心の成立』（ ）で彼の作品の日本語訳は完了した。これを出版すれば世界で初めてのパウル・レー全集になると思っていた。しかし2004年にドイツ本国で詳しい解説付きで彼の作品集が出版された。これが世界初のパウル・レー作品集である。筆者は世界初の作品集出版はできなかったが、日本初の全集訳の可能性は残っていた（ドイツでの作品集には彼の遺稿『哲学』が掲載されてい

(*) 日本では通常「ドイツ文学科」または「独文学科」と称しているが、本報告記載の学科には「ドイツ語学科」と称している学科も含まれる。当該学科の趣旨や授業内容を反映した名称であろうと考えられる。本報告では調査した学科の名称を統一的に「ドイツ語文学科」と表記する。

ない。私は遺稿集まで訳したので「作品集」と「全集」とを区別した)。全集訳にレーの生涯を詳述した文章や作品解題を付して研究成果発表を求めて科研費補助の申請をしたが、採択されなかった。不採択の理由も理解できなかったわけではないが、ともあれ出版費の問題が残って、この課題は継続している。

インデックスの作成の意味

上の二件はどの大学、学部にも属していてもできる仕事である。しかしニーチェの大型インデックスは（情報）工学部でしか実現しない、と筆者は80年代には思っていた。筆者がニーチェ・インデックスの必要性を感じたのはニーチェのある作品に出てくる *Erleichterung* という単語の意味を調べ始めたときである（参照：1977年11月 日本独文学会西日本支部第29回研究発表会「『人間的なもの、あまりに人間的なもの』における生の軽快化」）。この単語は中期遺稿から後期遺稿にかけて時々出てくる。ニーチェがこの単語を使用した箇所を全て調べようとして、全集と書簡集のインデックス作成を思い立ったのである。それ以来、筆者にとってニーチェ研究はインデックス作成と同意義となってしまった。コンコーダンスやインデックスの作成は地味な作業である。自分ながらずいぶんやせ細った作業を志したものだ、と再々思った。しかし決めたことは仕方ない。小手調べとして前任校の愛知教育大学では手作業でニーチェの小さな作品のインデックスを作ってみた。その上で、コンピュータを利用したインデックス作成を試みた。それに際して石田博幸教授にさまざまなアドバイスを受け、且つプログラム作成もしていただいた。ドイツでは既にツァラトゥストラのインデックスはコンピュータを使用して作成されてはいた（Rzepka/Anuschewski: Index zu Fr. Nietzsche „Also sprach Zarathustra.“ Anuschewski Verlag, Essen 1983.）が、それ以外の作品のインデックスは作成されていなかった。そのような現状の中で、情報工学部で人々の協力が得ら

れれば手作業をコンピュータ作業に移して、ニーチェ全集のインデックス化が可能ではあるまいかと考えた。いわばインデックスの大型化と高速化を求めたのである。着任後、研究室やカリキュラムの整備が一段落してから、学生（大学院生）さんに声をかけて、作業を進めた。

現在原典批評で定評のあるニーチェ全集および書簡集は de Gruyter 版である。全部で50巻近い。新書版で（作品15巻と書簡8巻で計）23巻にまとめた選集も出版されている。まず作品集15巻のインデックス作成を目指した。90年代にミュンヘンで知り合った出版社の社長さんが「インデックスができれば自分のところで出版します」と言ってくれたので、一安心した（しかし後述するように、インデックスを Web で配布することになると、この社長の好意にそえないことになる）。そのころ日本でショウペンハウアー協会が設立され、筆者も会員になり、何人かのショウペンハウアー研究者と交流した。福岡で開かれた研究会の折に、研究者の一人が、ショウペンハウアー作品のインデックスはないものか、と口にした。筆者はニーチェ作品のインデックスのことを説明した。その人が、ショウペンハウアーはどうですか、と聞いた。ショウペンハウアー全集は新書版で5巻である。筆者は「やってみましょう」と答えた。牛を馬に（馬を牛に、かな？）乗り換えたのである。しかし未だに目的地に着いていない。

英独仏中心主義との距離

今になって思えば、ショウペンハウアー全集のインデックス作成の約束をしていなければ、すでにニーチェ作品集のインデックスは完成していたかもしれない。ショウペンハウアーはフランス語やギリシャ語をたくさん使用している。フランス語はまだしも、ギリシャ語の入力に時間がかかるので、インデックスの元となる電子テキストの作成がなかなか進まない。それゆえにインデックス

作成の段階に達し得ていないのである。しかし、ショウペンハウアーを対象としたことにより、筆者のインデックスプログラムの長所も生まれた。少し誇張して言えば、ショウペンハウアーを対象とすることにより、筆者のインデックスプログラムは、一つの文化現象として、アングロサクソン文化中心は言うに及ばず、独仏文化中心主義から脱することができたのである。

ニーチェの作品でギリシャ語はほとんど使用されていない。「ここにはギリシャ語が使用されている」と分かれば済むくらいの頻度である。だからインデックスを構想した当初は、ギリシャ語を「*」印に置き換えてギリシャ語が使用されている箇所を明示すればよいと考えていた。しかしショウペンハウアーはギリシャ語を頻用しているので、「ここではギリシャ語が使用されている」を示すだけでなく、「このギリシャ語がここで使用されている」と単語とその変化形をインデックスで示す必要がある。ショウペンハウアーを対象としていなければ、ギリシャ語処理の必要性に気づかなかっただろう。現在のプログラムはフランス語やギリシャ語だけでなく、スペイン語やロシア語も処理できるようになっている。ショウペンハウアーを対象としたことにより、プログラムの汎用性が向上した。すなわち、「グローバル化＝アメリカ化」の、だけでなく、「グローバル化＝先進国化」の弊害も克服できたのである。

インデックス作成の諸問題

インデックス作成プログラム 90年代初めに制御システム工学科の石川真澄教授に紹介していただいた大学院生に、次いで機械システム工学科の安部憲広教授と田中和明助教授に紹介された大学院生さんにインデックスの作成意図や規模を説明してプログラムの作成を依頼した。これがうまくいくと、このプログラムを栗山、(最初にインデックス作成を相談した) 石田教授、(当該学生を指導していた) 田中助教授の頭文字を取って KIT Index Programm と呼ぼう

と計画していた。この学生さんたちはパールを使用してプログラムを書いた。このプログラムは対象テキストが膨大になると作業時間が著しく長くなる。今になって思えば、処理に時間がかかったのはプログラムや使用言語のせいではなく、筆者のコンピュータ環境のせいだったかも知れない。その学生さんたちへの依頼が成果なしで終わるのは数年後である。その後も数人（または数人のグループ）にプログラム作成を依頼した。学生さんの勉強の合間にしてもらうので作成はなかなか進まない。テストプログラムはできたが修論が忙しかった、という理由で完成しなかった場合もある。その頃は8インチのフロッピーにプログラムを保存していた。

配布メディアの問題 インデックス配布メディアの変化はここ20年間の一般的なメディア変化を反映している。当初は紙（本）での配布しか考えられなかった。先述したツアラトウストラ・インデックスばかりでなく、ベンヤリルケのインデックスも本の形で出版されていた。しかし全集のインデックスを紙に印刷しようとすれば印刷費用も多額になるし、巻数が増える。筆者が当初に想定していたのはフロッピーディスクによる配布である。しかし90年代中ごろにはFD配布は時代遅れになっていた。その頃はFDの資料も活かすためにCD-ROMでの配布を考えた。しかし今となってみればWebでの配布に対応せざるを得ない。

再び、インデックス作成プログラム 21世紀になって電子情報工学科の古川昌司教授に紹介していただいて非常に優れた学生さんに出会った。数年間の飛び飛びの作業で、彼の修士修了直前にプログラムが完成した。これは使える、これでプログラム作成は終了、と思った。しかし、この数年間に（私の使用する範囲内で）メディアが進化し、残念ながら彼のプログラムはWebでの配布に対応していなかった。さらにテストを繰り返してみると、ページ数、行数を自動的に付ける機能にも幾分かミスが見つかった。そのときには作成者はす

でに卒業していた。何人かの学生さんにそのプログラムの修正を依頼したが、彼らは、新規作成の方がはるかに簡単だと言う。04年度に知能情報工学科の野村浩郷教授と中村貞吾講師に事情を話して、一人の大学院生を紹介していただいた。その院生さんが JAVA を使用し、Web で配布できるプログラムを06年春に作ってくれた。完成版は第22版であった。この学生さんが私のさまざまな要求をプログラムに生かすまでに21回の試行錯誤を繰り返したわけである。この時は不具合の指摘も修正希望も、プログラムやテスト結果の受け渡しもメールと添付ファイルで行なった。

さらにインデックス作成途中に分かったことであるが、筆者が持っている PC のメモリー (OS は Windows 2000) では複数巻インデックス作成には不十分であった。1 巻 (約500ページ) を対象としたインデックスは10分ほどで出来るのだが、5 巻を対象とするとフリーズしてしまうのである。メモリーが不足しているのであった。内蔵ハードディスクを増設すれば解決する。ところが筆者のマシンはあまり一般的でないハードディスクを使用していたので、ハードディスク増設は予想以上に高額にのぼりそうであった。友人によると、それ位の金額を出すなら PC を変えたほうが賢明であるらしい。インデックス作成のために筆者の情報環境をも改善しなければならなかった。

対象言語の問題 ショウペンハウアーの文章はドイツ語、フランス語だけでなく、„Und leider auch“ (Goethe: Faust. 356) ギリシャ語を含んでいる。ギリシャ語だけでなく、ドイツ語とフランス語も英語では使用しない字母を使用する。これを処理するために unicode 使用を思いついてくれたのは三番目が四番目に依頼した学生さんだった。さらに「ss」と「ß」、「a」と「ä」、「e」と「é」など字が異なるのにそれ自体は前後位置の優劣を持たず、その字の後ろに来る字によって順番が決められる字があるし、ギリシャ語は英語アルファベットの順番では処理できない。これらを解決するために、プログラムを作る

学生さんはずいぶん苦労したと思う。21回の試行錯誤のうちの数回は対象言語に関する案件であった。

テキスト作成の問題 テキストはページごとにイメージスキャナーで取込み、それを OCR で読取り、素電子テキストとする。ここまでは簡単ではあるが、手作業で行わざるを得ない。その素電子テキストにプログラムがページ数と行数を自動的に付し、行の最後の単語にハイフンがついている場合には、プログラムがそのハイフンを削除し次行の最初の綴りと結合させる。しかし OCR には誤認識があるし、行末のハイフンも常に不要とは限らない。それらを確認し、使用単語を正しく反映したインデックスを作るには素電子テキストでのスペルチェックを含めたテキスト全般の点検作業が欠かせない。フランス語のアクセサンが正しくない場合には入力言語をフランス語に変えて入力しなければならないし、ギリシャ語は全て手作業で入力せざるを得ない。

素電子テキスト作成の第一歩、すなわちイメージスキャナーでの取込みと OCR での読取りは作成手順を指導すれば、学生さんにやってもらえる。2006 年には、約十年間かけてショウペンハウアー全集とニーチェ著作集の素電子テキストはほぼ作成することが出来た。しかしスペルチェックについては学生さんでは無理なので、ドイツ語の知識を持っている方に依頼した。ショウペンハウアーやニーチェの表現（単語）は19世紀のそれであるし、彼ら独自の表現もある。依頼した方には通例のドイツ語でのスペルチェックしかやっていただけない。その人が検査したテキストを、筆者自身で再検査（再スペルチェック）しなければ不安も残る。このようにスペルチェックに迷っていたころはプログラムが出来上がるかも不明な時期だった。プログラムが完成しなければ電子テキストを作っても意味はない。またスペルチェックを依頼した費用が筆者の予想をはるかに越えていた。筆者の予定した費用ではとても覚束ない。これらの理由により、ドイツ語とフランス語のスペルチェックおよびギリシャ語入力を

自分で行うことにした。06年暮れの時点でショウペンハウアー全集 5 巻のうち 3 巻までのギリシャ語入力とスペルチェックがやっと済んだ。

著作権 インデックスの原典はショウペンハウアー全集とニーチェ作品集および書簡集である。作品の著作権はドイツの出版社が有している。インデックス作成を計画した時点から、インデックスの原典使用が出版社の著作権に触れないかどうか気になっていた。ドイツの友人は、インデックス作成に全集を使用しても全集の電子テキストを公表しない限り著作権を侵さない、と言う。本学の専門家にも意見を聞いた。同じ意見であった。さらに、インデックスを使用するにはインデックスに使用している全集を持たなければならないので、出版社はインデックス出版を歓迎するだろうと筆者を励ましてくれた。

インデックス作成の今後

インデックス作成は06年夏には技術的にも法的にも目途がついた。インデックスの基となる電子テキストの誤植修正やスペルチェックが終われば、すぐにもインデックスは作成できる。しかし、その電子テキストの作成には、残念ながら、個人でやれることには限りがある。いま素電子テキストが完成している対象に関して言えば、必要な作業は、まずはショウペンハウアー全集のギリシャ語入力と最終的スペルチェック、次いでニーチェ作品集のスペルチェック及びニーチェ書簡集（5 巻）のイメージスキャナーでの取込みと OCR での読取りとスペルチェックである。それが終われば、当初に計画したように、50巻のニーチェ全集と書簡集の素電子テキスト作成およびテキスト全般のチェック作業に進む。これが終わるまでにはかなりの心理的、身体的、時間的、そして経済的エネルギーを注ぎこまなくてはならない。

着任後にはじめた分野

このようなわけで、着任時に計画していた三件のうち二つは不十分ながらも達成できた。「情報工学部でこそ」と計画していたインデックス作成はやっと一つ目の山を越えて、二つ目の山の五合目位にまで登った段階である。ゆっくりとではあるが、今しばらくはこの作業を続けてみたい。

情報工学部への着任前にはそれほど考えてはいなかったが、着任後に周囲の人々との検討や協力を得て手を染めた仕事もある。

ドイツ語 CAI 作成

一つ目はドイツ語 CAI 教材の作成である。情報創成専攻の橋本正明教授や碓崎賢一教授や井本祐二技術職員および碓崎研究室と橋本研究室内の学生さん、人間科学講座の中川勝昭助教授と作業を進めることができた。その意味では、筆者のドイツ語 CAI 作成は筆者の情報工学部勤務がなければ着想も実行もあり得なかった作業といえる。ドイツ語 CAI 研究の成果をいくつかの国際学会で発表し、それを契機に外国人研究者との交友も広がった。

アジアにおけるドイツ語カリキュラム

いま一つの新たな研究はドイツ語教育の国際比較である。2002年8月北京での Asiatische Germanistentagung で各国でのドイツ語教育事情や各大学のドイツ語カリキュラム改善について各国のドイツ語教育研究者と話している時に、東アジア諸国でのドイツ語教育比較の必要性和アジア横断的なドイツ語カリキュラム構築の可能性に思い至った。個人の範囲でできることは限られているとは言っても、できるだけことはやってみようと、その足で、学会で知り合いになった研究者の勤務している大連外国語学院（大連外国語大学）を訪問してドイツ語文学学科のカリキュラムを聞き、学生にインタビューした。その

後、学会で知ったゲルマニストを通して 2004年に韓国（ソウル）、2005年に台湾（台北）を訪問し、いくつかの大学の事情を調べた。さらに、キューバの知人を頼りに 2006年 3月にキューバで初めて開催される第12回ラテンアメリカ・ゲルマニスティック学会（12. ALEG (Asociación Latinoamericana de Estudios Germanisticos) Kongress）に出席した折に、ハバナ大学外国語学部を訪問して事情を聞いた。

以下にこの研究の一端を報告する。この内容の一部はすでにドイツ語の論文で公表している。残念ながら、この報告はアジア横断的なドイツ語カリキュラム構築には程遠いが、いずれは実現するであろう東アジア共通ドイツ語カリキュラム作成という千里にわたる作業の第一歩とは言えると思いたい。

東アジア諸国のドイツ語文学学科カリキュラム

はじめに

日本では、経済活動のグローバル化の影響を受けて、文化、メディア、社会、医療、科学、政治等などの分野でグローバル化が猛烈なスピードで進んでいる。教育の分野でもその影響を逃れることはできない。しかし、グローバル化とは「アメリカ化」の別称に過ぎない、という現実を目の前にしても、ドイツ語教育の分野ではグローバル化はそれほど深刻に討論されてこなかった^(**)。教育

(**) 1997年 7月の大学設置基準改定による大学教育の大綱化は第二外国語授業の大幅な減少をもたらした、ドイツ語授業とドイツ語教師の激減を引き起こしたし、さらにそれを進行させつつある。経団連は2000年になってからではあるが、グローバル化に対応して英語力の一層の推進を求め、学習指導要領の大綱化をさえ要請している (<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2000/013/honbun.html>)。経団連の立場が文部行政

のグローバル化はその進行を一段と早め、それを無視した大学教育は、無視を続ける者の意思とは関係なく、消え去るであろう。ドイツ語教育におけるグローバル化対応（または、少なくともその一つ）は、大学教育の「実学化」をいたずらに無視するように大声で語るところにはない。言語教育での「アングロ・サクソン化」を嘆くところにもない。国内外においてドイツ語で活躍できる職業人を育てるところにある。本稿では、その視点から中国、韓国、日本のドイツ語文学学科でのカリキュラムを比較する。それをさらに相対化するための参考資料として他の3大学の事情をも簡単に述べる。

贅言するまでもないが、各国の各大学は各国の文化、社会の要請を受け、設置者の明確な目的に基いて設置される。しかし、そのカリキュラムは設置者の思惑通りには構成されない。学内外の行政や管理部局の意向もあれば、各種委員会の対応も一律ではないし、学部や学科の担当者にもしかるべき主張がある。現実に実施されるカリキュラムは多くの変数を持つ方程式から導かれた偶然の解答に過ぎない。まして一旦は実施されているカリキュラムを社会変化に対応させて改変するのは設置者の方針通りには進行しないし、且つ緩慢にしか実施されない。このような理由で、以下に述べるカリキュラムは各国のドイツ語文学学科に関する教育方針を忠実になぞったものでもないし、各大学の特徴を象徴しているわけでもない。事例提示にすぎない。

なお、本論の対象はカリキュラム論ではないので、各国、各大学におけるカリキュラムの性格や本質について論じない。また調査は数年間に亘っているの
で2006年度での数値とは異なる可能性もある。授業科目の表示に際しては「ド

に及ぼす影響力の大きさを考えれば、いずれは指導要領が大綱化されるであろう。グローバル化がもてはやされ始めたころ、私たちは教育におけるグローバル化が「大綱化」を導き、大学教育においてはドイツ語教育の衰退をもたらしたし、文化の画一化を一段と進行させる事態を「深刻に」捉えていなかった。現在においてもドイツ語教育に関してはグローバル化を根底から批判できる用意はない。

イッ文学」、「ドイツ文化」等の「ドイツ」を略し、単に「文学」、「文化」と記載する。また、以下では当該授業科目の単位数を授業科目直後の「()」内に記す。単位数を比較しても、(日本では90分の授業でも講義では2単位であり、演習では1単位であるように) 学習時間の多寡そのものを示しているわけではない。本論には各大学の大学案内や学科案内などに記載されている単位数などを使用しているので、正確な学習時間の比較はなされていない。

中国、大連外国語大学ドイツ語文学学科

大連外国語学院は1960年代に設立されており、比較的歴史の浅い外国語大学である。しかし現在は英語文学学科、日本語文学学科、韓国語文学学科、フランス語文学学科、ロシア語文学学科を擁する中国東北部最大の外国語大学である。ドイツ語文学学科は約10年前に3年課程から4年課程に昇格し、現在はドイツ語教師11名で、1学年50名の学生を受け入れている。

4年間での学習時間は3,000時間、そのうち1,800時間をドイツ語教育に当てている。その授業構成は次のようである(2002年度現在)。

必修科目

教養科目 (41) : 毛沢東理論 (3)、マルクス主義の哲学 (3)、マルクス主義の政治と経済 (2)、鄧小平理論 (4)、現在の政治と理論 (2)、法律概論 (2)、倫理学概論 (1.5)、渉外マナー (1.5)、スポーツ (7)、大学での中国語 (8)、コンピュータ教育 (7)

専門科目 (85.5) : 初級と中級 (31)、上級 (8)、科学技術講読 (7)、読本 (4)、表現 (4)、作文 (12)、会話 (8.5)、翻訳 (7.5)、通訳 (3.5)

選択科目

教養科目（6）

専門科目（24）： 第二外国語(15)、語彙、ビジネス・ドイツ語、事情、文学など

論文・実習（6）：卒業論文（3）、社会実習（3）

大連外国語大学ドイツ語文学学科はロストック大学やウィーン大学と提携しており、3年生を毎年留学させている。インターンシップも充実させており、大連市内のドイツ系会社で1ヶ月間の実習を課している。これらにより学生はドイツ語を上達させるだけでなく、ドイツの社会、歴史、文化などに関する知見を深める。卒業生の多くはドイツ系の会社や中国の会社内でドイツと関係を持つ部署に就職している。

台湾、淡江大学ドイツ語文学学科

淡江大学は1950年に「淡江英語専科學校」として創設された。現在は文学部、外国語学部、国際研究学部、教育学部、経営学部、商学部、理学部、工学部、技術学部を擁する総合大学であり、台北市内にサテライトキャンパスを持ち、別の新キャンパスも建設中である。外国語学部は英語文学学科（大学創設の母体、学部学生だけで1100名、マスターコース、ドクターコースの学生が100名という大学科）、スペイン語文学学科、フランス語文学学科、ドイツ語文学学科、日本語文学学科（専任教員24名、1学年180名）、ロシア語文学学科、異文化研究センターから構成されている。

ドイツ語文学は1963年に外国語文学学科の一分野として研究教育を行っていたが、1975年には一つの学科として独立した。現在は専任教員10名、1学年60名で、日本の大学から見ると大きな学科である。外国語学部では4年間に135

単位の履修を課しているが、そのうち学科関連科目で113単位を揃えなければならない。学年毎の主な授業科目と単位数は次のようである。

- 1 年生 文法（8）、読本（8）、会話（8）、ヒアリング（4）など
- 2 年生 読本（8）、古典文学（4）、作文（4）、文法（4）、芸術史（4）、
 コンピュータ教育（4）、会話（4）、文化史（4）、青少年の文
 学（2）、ヒアリング（2）、歌曲（2）、演劇（2）など
- 3 年生 作文（4）、講読（4）、翻訳（4）、新聞のドイツ語（4）、ビジ
 ネス・ドイツ語（4）、会話（4）、ドイツ・オーストリア・スイ
 ス事情（2）など
- 4 年生 文学史（4）、近代文学（4）、作文（4）、翻訳（4）、秘書実務
 （4）、日常会話（4）など

ドイツ語文学学科では2001年から3年生の約半数がケルン、ボン、ライプツヒ、ウィーン等の姉妹大学に1年間留学している。これが卒業生の就職に有利に働いている。留学中にドイツ等での大学で研究を続ける計画をたて、卒業後に改めて留学する学生もいる。外国留学を在學生に奨励しているのはドイツ語文学学科のみではない。学科案内でほとんどの学科が外国留学を宣伝するとともに実績をも強調している。

韓国、ソウル大学ドイツ語文学学科

韓国では高等学校で第二外国語の学習を課している。一時期はドイツ語やフランス語の学習者が多かったが、近頃は中国語と日本語の学習者が激増し、ドイツ語学習者は激減している。それによって高校のドイツ語教師も大きく影響を受けている。他の言語を教えたり、複数校を掛け持ちで教えなければならなくなっている。

ソウル大学にはドイツ語文学学科が二つ、一つは人文学部に、一つは教育学

部にある。人文学部ドイツ語文学学科では学年と学期によって次のような科目が開講されている。

	冬学期	夏学期
1 年生	文学	古典
2 年生	文化	近代文学
3 年生	会話、言語学、短編小説、 文法、詩	会話、演劇、現代文学、事情、 文学、言語史
4 年生	文学と演劇、文化、会話、 近代文学	文学と映画、作文、ファウスト

教育学部のドイツ語文学学科での開講科目は文法概要、会話、クラスでの作文、青少年の文学、文学講読、短編小説講読、詩講読、演劇講読、ドイツ語文学教育法、ジャーナリズムのドイツ語、文学史、ドイツ語言語学、ヒアリング、教材論、発音論、ドイツ語ディベート、韓国でのドイツ文学の位置などである。

ソウル大学では学部で多少の違いはあるが、多くは130単位が卒業単位である。両学科ともに42単位が教養必修単位で、32単位が学科必修単位である。ドイツ語文学学科の学生にとってもドイツ語やドイツ文学関連科目の必修単位は32である。

これはソウル大学の例に過ぎない。他のほとんどの大学のドイツ語文学学科ではドイツ語やドイツ文学の必修単位数はこれよりも多いようである。

日本、上智大学ドイツ語文学学科

上智大学は1913年に創設されたが、ドイツ語文学学科は最初に設置された三学科の一つである。ドイツ語文学学科の現在の履修単位の大略は次のようである。

必修単位：

一般教育（14）：人間学（2）、体育（2）、情報（2）、外国語（8）

専門教育（32）：基礎ドイツ語（12）、基礎ドイツ語（14）、ドイツ語
圏入門（6）

選択単位：

一般教育（16）

学部基礎（8）：歴史学、社会学、地理学、哲学、言語学、芸術、国際関
係論など

専門教育（28）：ドイツ語（10、口頭表現、聴解、読解）、ドイツ学
（18、文法、文学、教育法、文化、教育法、社会、メディア、思想など）

その他（26）

上智大学では多くの学生が在学中に留学しているし、学科もそれを勧めている。卒業生の就職率も決して悪くはない。上智大学のカリキュラムは伝統的、人文科学的観点から見れば、うまく構成されていると言える。しかし、卒業生がドイツ語を生かした就職先を探すのを前提として構成されているとは言えない。

日本の旧帝大七大学、または国立大学法科大学でのドイツ語文学学科のカリキュラムは上智大学のカリキュラムとはいささか趣を異にしている。特に旧帝大においては依然として大学でのドイツ語教師養成を目指している。その点では「参考 3」に見る台湾大学の日本語文学学科におけるカリキュラムの「日本」、「日本語」を「ドイツ」、「ドイツ語」に置き換えたカリキュラムに似ている。しかし、ユニヴァシティならざるマルチユニヴァシティ（さらには「知識の

コンビニ化」)の現状やドイツ語授業数の激減 (= ドイツ語教師の需要激減) という時代の現実を前にすれば、旧帝大ドイツ語文学学科のカリキュラムも卒業生のドイツ語能力を生かした卒業後の方向を考えて変わらざるを得ない。

おわりに

上に見た 4 学科での授業科目のうち他の学科に見られない科目および専門科目の最低取得単位数 (A欄) と卒業単位数に占めるその単位数の比率 (パーセント、B欄) を整理すると下表ようになる。

大学	特色ある授業科目	(A)	(B)
大連	大学での中国語、渉外マナー、科学技術文献講読、ビジネス・ドイツ語、1 年間の外国留学	97.5	60
淡江	ビジネス・ドイツ語、秘書実務、1 年間の外国留学	113	83
ソウル	特になし	42	32
上智	特になし、(自由意志での) 1 年間の外国留学	60	51

各学科でのカリキュラムの構成や改変には多くの要因が考慮されなければならないので、上の表だけで各国の方向性を簡単に規定するわけにはいかない。筆者は2006年 8 月ソウルで開かれた Asiatische Germanistentagung 2006 Seoul で本稿の一部を発表した。その折に韓国の或る私立大学のスタッフは勤務校のカリキュラムはソウル大学での例と異なる諸点を詳しく指摘した。この出来事から端的に推測できるように、以下のコメントは一定の調査に基づく結論ではなく、見学者の概括的印象と解していただきたい。

中国と台湾の大学は卒業生の就職を考慮したカリキュラムを構成しなければならない「要請」が韓国や日本よりも強い。この要請は大学の設置者や理事会からなされる場合もあれば、「社会の要請」と言う形で現れるケースもあり得る。時には学科内スタッフからの内在的要請としてなされる事例も含まれる。

カリキュラムの構成や改変を検討する時に、外的および内的職業志向的要請がなされているのである。その志向性は端的に専門科目履修単位と専門開講科目および 1 年間の外国留学方針に示されている。

韓国と日本ではしっかりとした教養を見につけた市民を社会に送り出そうとしている。日本では大学と職業学校とは厳しく区別されており、多くのドイツ語教師は、学生が社会に出てすぐ役立つ知識や技能を獲得するシステム（の確立）にそれほど意を用いていない。伝統的大学教育から脱していないとも言える。

中国と台湾は、ドイツを通して、ドイツとともに、ドイツ内で生活しようとする学生を育てようとしており、韓国と日本は偶然によりドイツとともに、ドイツ内で生活するかもしれない学生を育てようとしているのである。

各国、各大学、各ドイツ語文学学科での教育方針やカリキュラム比較なしには、東アジアでのドイツ語文学学科の統一カリキュラム作成はあり得ない。その意味では今後は 4 大学のドイツ語文学学科のカリキュラムだけではなく、各国でいくつかの拠点大学を選んで詳しい調査を行い、東アジアでのドイツ語文学学科共通性カリキュラムを目指した比較研究が望まれる。

本報告では東アジアのドイツ語文学学科のカリキュラムを例示したが、共通カリキュラムを検討する際の資料として参考例を三件示しておきたい。

参考 1 ドイツ、マールブルク大学日本研究所

ドイツにおけるドイツ語文学研究は一つの学科の範囲を超えており、優に一つの学部の範囲を形成している。しかも各大学で事情が異なるゆえに当報告では取り上げることは出来ない。しかし、ドイツの大学では外国語文学研究をど

のように考えている（または、考えていた）かの例としてマールブルク大学日本研究所を紹介するのも無意味ではあるまい。

マールブルク大学日本研究所は約20年前にマスターコース制のカリキュラムを採用した。カリキュラムは次の三つの要素から構成されている（「日本の」、「日本語」は省略）。

- 1 方法論を学習する (38 SWS) : (日本の) 地理、社会、歴史、政治、経済、法など
- 2 幅広い知識 : (日本の) 社会と文化など
- 3 言語能力 : 基礎 (28 SWS、(日本語の) 文法、講読、表記、表現練習、会話、各シーンでの表現など) と日本語上級 (8 SWS)

専門教育 (28 SWS) においては次の4分野から選ぶ：社会と歴史、法、宗教と精神史、経済。そして1年間の日本での研究を課していた。

これは卒業生が日本、またはドイツ企業の日本関連部署で働くことを視野に入れたカリキュラムであった。しかしマスターコース制のカリキュラムは4年制の学部の上にマスターを置く学部主体のカリキュラムに取って代わられた。その流れの中で、日本研究所のカリキュラムは文学や精神科学を中心としたものに代わっている。この間の事情を知る教授の一人は、現在のカリキュラムは日本の社会的、法的、経済的、歴史的現実を教えていない、麗しき日本文学、すばらしき日本という国を教えようとしている、つまるところ愚かで役に立たない卒業生を送り出すに過ぎない、ときわめて批判的である。

参考 2 台湾、台湾大学日本語文学学科

台湾では国立大学にはドイツ語文学学科はない。台湾大学の前身は日本支配時の1928年に勅令によって設置された帝国大学であり、ドイツ語文学学科は置かれていなかった。それが現在まで影響しているのである。もし台湾大学にド

イツ語文学学科があるとすれば、日本での旧帝大でのドイツ語文学学科のカリキュラムに類似した構成になっているはずである。現在日本の旧帝大ドイツ語文学学科のカリキュラムを考えるに際して、「もし台湾大学にドイツ語文学学科があれば、どのようなカリキュラムを有しているであろうか」と逆照射して、その概要をスケッチしてみよう。

しかし現実には台湾大学にはドイツ語文学学科は存在しない。外国語学部の日本語文学学科のカリキュラムにおける「日本」と「日本語」を「ドイツ」と「ドイツ語」に置き換えれば、一つのカリキュラムモデルが得られる。それは以下になると推測される。日本の旧帝大でのドイツ語文学学科のカリキュラムをご存知の方は比較していただきたい。

一般教育 (20) : 英語 (6)、体育 (2)、歴史 (4)、文学 (4)、憲法 (4)

必修科目 (84)

1 年生 基礎 (8)、会話 (8)、作文 (4)、ヒアリング (4)

2 年生 中級 (6)、会話 (6)、作文 (4)、文法 (4)、講読 (4)、
文化 (4)

3 年生 上級 (4)、日本語学 (4)、文学史 (4)、講読 (4)、翻訳
(4)

4 年生 近代文学 (4)、古典文学 (4)、言語学 (4)

選択科目 (16) : 歴史、演劇、事情、新聞の日本語、ビジネス・日本語、教
育法など

参考 3 キューバ、ハバナ大学ドイツ語文学学科

筆者は2006年3月に第12回ラテンアメリカ・ゲルマニスト会議に出席するためにキューバのハバナを訪問した。会議終了後、ハバナ大学外国語学部で授業に参加し、日本語文学学科やドイツ語文学学科の教師や学生に事情を聞いた。

以下はその報告である。ハバナ大学ドイツ語文学学科の事情は日本だけではなく、中国や韓国のドイツ語文学学科とはかなり異なっていた。資料はなく、会話だけでの説明だったので、説明者の主観が混じっている可能性は大きいし、筆者のメモに正確さを欠く箇所があるかもしれない。以下はそのような条件付での報告として読んでいただきたい。

キューバの大学でドイツ語文学学科を持っているのはハバナ大学外国語学部だけである（外国語学部には日本語文学学科もある）。外国語学部は予備コースを有しているので、いわば5年制ともいえる。予備コースの授業は少し複雑である。冬学期、夏学期（学年開始は9月、終了は7月）それぞれ20週、授業科目はドイツ語、体育、スペイン語。ドイツ語授業は冬学期前半の10週は週30時間、後半の10週は週26時間、夏学期は週26時間（1時間は45分授業）。90分授業を15回（ $90 \times 15 = 22.5$ 時間）で1単位として計算すると、予備コースでは36単位となる。1年間で36単位の習得は、台湾の淡江大学のドイツ語文学学科と同じ程度で、学習時間は多い。

ドイツ語の予備コース入学生は1学年に28～30名である。ほとんどの予備コース生は本科に入れる。すなわち大学1年生になれるわけである。数年に1名とか2名とか本科に入れない学生がいる。2006年夏学期の4年生は20名（うち男子は5名のみ）。入学時には総数25名だったそうだから、3年間に25名中5名が留年または退学したことになる。となると、留年率または退学率はかなり高い。

本科コースになると、両学期ともに基本的に16週、ドイツ語の授業時間は学期ごとに16——>12——>12——>6——>4と減っていく。それに比例して言語学、文化論、文学、音声学、第二外国語などの授業が増える。2年生から3年生になるときはスペイン語でレポートを、卒業時、修士修了時にはドイツ語で論文を書く。3年生になると翻訳理論、統語論、政治、社会、歴史な

どがドイツ語で講義される。4年生になると通訳や翻訳の学習（訓練）が増える。本科の授業は（多くて）30名の1学年を2クラスに分けて、15名で行われる。授業ではドイツで出版されている教科書を使用している。2000時間の学習を前提として編集されている教科書を3年生で終える。ドイツ語教師は6名で非常勤講師も数名なので、すべての授業をドイツ語教師が担当するわけにはいかない。1，2年生の授業の一部は成績の良い3，4年生が教える。3年生になると授業はドイツ語のみを使用して行われる。

2年生冬学期からインターンシップが始まる。この学期は4週間。4年生の夏学期は週2日はインターンシップに行き、大学に来るのは週3日だけ（勉強する場所は大学が多い。家や寮ではあまりしない）。インターンシップ先は観光業（ホテル、旅行社など）、催し物（スポーツ大会、展示場、博物館など）、役所（文書の翻訳訓練など）が主な職場である。

卒業後はインターンシップ先に就職したり、出身地に帰って教師になったり、修士課程に進学したりする。国が紹介した職場で働く場合が多い。

筆者が参観した本科1学年のクラスでは4年生の学生さんが3，4格支配の前置詞を教えていた。教科書の「空欄をうめよ」式の問題を学生が順番に答えていた。3年生の授業ではドイツの選挙制度について授業をしていた。ドイツ語のレポートを学習（単語の説明はスペイン語で行われていた）した後に、教師が一人の学生を選ぶ。教室前方に教師と学生は二人で向かい合って座り、他の学生はそれを見学する。教師はドイツ語で質問をし、学生がドイツ語で答える。質問の内容は「現在の首相は誰ですか？」、「どのようにして選ばれますか？」などの基本的な知識を確認するレベルであった。

16の各州にある国立大学ではドイツ語教育が行われており、数名のドイツ語教師が勤務している。それはハバナ大学のドイツ語文学学科卒業生である^(***)。ドイツ語教師になるには学部卒業後に修士課程に進む必要がある。

ハバナ大学ドイツ語文学学科の存在意義は国の方針に従った人材養成にある。その範囲内では卒業生の就職を考慮したカリキュラムともいえる。しかし卒業生の進路は常に国内に向けられている。国外（ドイツ語圏）で活躍する人材養成という視点ではない。それが中国や台湾でのドイツ語文学学科との基本的な相違点である。

参考 4 ラテンアメリカ・ゲルマニスト会議

ラテンアメリカ・ゲルマニスト会議 (ALEG: Asociación Latinoamericana de Estudios Germanisticos) は1955年に Mendoza (Argentinien) で準備会を開き、設立は1965年であるから、半世紀に及ぶ歴史の古い地域ゲルマニスト学会である。準備会を第1回と位置づけ、2006年の第12回目はキューバのハバナで開催された。それまでの開催年と開催地は1965年 Mendoza (Argentinien)、1969年 Cordoba (Argentinien)、1973年 San Paulo (Brasilien)、1979年 Cordoba (Argentinien)、1985年 Buenos Aires (Argentinien)、1991年 Mendoza (Argentinien)、1994年 Mexiko Stadt (Mexiko)、1998年 Concepcion (Chile)、2000年 Caracas (Venezuela)、2003年 San Paulo (Brasilien) であった。

次回は2009年に Cordoba (Argentinien) で開かれる。連絡先は Präsidentin 2006 2009: Dra. Adriana Massa, Universidad Nacional de Córdoba, Argentina, [mailto: massadri@ffyh.unc.edu.ar](mailto:massadri@ffyh.unc.edu.ar) または Vizepräsident: Dr. Paulo Astor Soethe, Universidade Federal do Paraná, Curitiba, Brasil, [mailto: soethe@ufpr.br](mailto:soethe@ufpr.br) である。

(***) 筆者は数年前に日本のドイツ語教師数の変遷を調査した（参照：『漂流する日本、漂流する大学、漂流する私』日本独文学会研究叢書032「ドイツ語・第二外国語教育の危機とドイツ語教師の姿勢」, 2005年, pp.83-102）。その際に、日本独文学会の資料により、1950年代のドイツ語教師名簿を調べた。当時のほとんどのドイツ語教師の出身校は東京大学であった。現在のキューバのドイツ文学会は、約50年前の日本独文学会にも似て、キューバ大学ドイツ語文学学科の同窓会のような趣かと思われる。

2006年3月中旬ハバナでの第12回大会のテーマは „Ausbildung, Forschung, Berufsbezug“ (「教育、研究、職業人養成」) で、参加者は30ヶ国から290名、研究発表数は159であった。2006年8月に韓国のソウルで開催された第6回目の Asiatische Germanistentagug^(****) のテーマは Kulturwissenschaftliche Germanistik in Asien であったのを見ると、アジアにおけるよりもラテンアメリカのほうが教育や職業人養成に関心を持っていることがうかがえる。それを反映して、全体講演では、ドイツ文化研究と職業人養成の乖離を戒める趣旨の報告があり、分科会でも旅行業に特化したドイツ語教育の実践例などが発表されていた。

日本のゲルマニストはアジア・ゲルマニスト会議では発表は日本独文学会を通して申請するが、ラテンアメリカ・ゲルマニスト会議は個人が上記連絡先に申し込める。

(****) アジア・ゲルマニスト会議は1991年に第1回目をベルリンで開いている。それ以降の開催年と開催地は1994年北京、1997年ソウル、1999年福岡、2002年北京、2006年ソウルである。2006年ソウルでの参加者は270名、発表者数は135であった。ラテンアメリカ地域とアジアとではゲルマニスト会議の歴史は大きく異なるが、規模はほぼ同じと考えてよい。